



家庭内の 話

川崎ゆきお

「家庭内の、ちょっとしたごたごたなのですが、聞いてもらえますか」

「聞きません」

「えっ」

「そんな固有のローカルな話など聞きません。興味がありませんし」

「それはまた、人付き合いの悪い」

「他の話なら聞きましょう。もっとグローバルな」

「うちの妻がですねえ」

「サイ。動物を飼っておられるのですかな。ああペットか。それもまた家族のうち。だから家族の話なのでしょ。サイが何かしでかしましたか」

「動物のサイではありません。それに家庭でサイなど飼えないでしょ。どこで売っているのです。売買を禁じられていると思いますよ」

「サイの角は高価で売れます。だから飼っているのかと思いましたよ」

「まあ、うちの妻が角を出した話なので、似ていなくはないのですが」

「ああ、家庭内のごたごた話は聞きません」

「はい、結構です。ではどういう話なら」

「もっと一般的な」

「家庭内の話は一般的でしょ」

「まず名前が出てくるのがいやなのです。米子とか、留子とか、そういうのを聞いた瞬間、臭いものを感じます」

「それはあなたの感性でしょ。一般の人は留子が臭いなどとは思っていませんよ」

「留子というのはだめです」

「それこそ一般性に欠けますよ。日本全国の留子を敵に回すようなものですし、それに留子がすべてそんな人物だとは限りません。あなたの知っている留子が臭かったのでしょ」

「留子が臭いのではない。名前が臭い」

「ほらほら、それこそあなたの方がローカルだと言うことですよ。自分の知っている範囲内で判断されている」

「しかし、家庭内の話は聞きたくありません。サイの次は息子が出てきたり、娘が出てきたり、おじいさんが出てきたり、近所の人が出てきたり、大久保の叔父とか、根岸の姉さんとか、蒲田の兄とかが出てくるのでしょ」

「そんな土地に親戚はいません」

「それで、根岸の姉がどら焼きを土産に遊びに来たとか」

「だから、根岸に姉なんていません」

「じゃ、どんな話ですか」

「聞く気になってくれましたか」

「ああ」

「うちの妻が旅行に行きまして」

「ああ、そこまでです」

「まだ、何も話していませんが」

「あなたのサイのような妻が旅行へ行った。もうそこまで聞けば十分です」

「そうですか」

「これでも聞いた方ですよ」

「私、喋った気にならないのですが」

「だいたい想像がつきます」

「旅行に出て、トラブルに巻き込まれたのです」

「それはすごい事件ですかな」

「いいえ、観光バスで行ったのですが、置き引きに遭いましてね」

「あなたの妻が、何かを盗られた」

「妻の鞆は無事です。同席のツアー客です。その人の鞆が消えました。それで、妻が疑われたのです」

「そんなことはないでしょ」

「あるんです。その盗まれた人が、妻が怪しいと言い出したのです」

「どうして」

「だから、妻の人相が悪いためです」

「サイの妻ですからねえ。しかし、盗んだとしても、何処に隠したのでしょうか」

「そうなんです。バスの中ですよ。隠し場所がない。まあ、トイレ休憩で、外には出ますが」

「結局それは、その人の勘違いで、置き引きじゃなく、何処かで忘れたのでしょ」

「そうなんです。よく分かりなしたねえ。バスの中にもトイレがあるんです。そこに置き忘れただけ」

「それで終わりましたか。しかし家庭内のトラブルじゃなかったですよ」

「あなたがいやがるので、別の話にしました」

「ああ、それは気を遣っていただいて、ありがとう」

